

## 一、弔辞

### 弔（電）辞

経済産業副大臣

衆議院議員 松下 忠洋



ご令室様の訃報に接し言葉にならない悲しみに襲われています。

ご令室様は入来花水木会代表として昨年七

回目を数えた「入来薪能」の開催、同人誌「火

の鳥」などへのご執筆、お父様が創建された

「世界平和同願会・昭和寺」での活動など、

ご主人様ともども地域文化の振興、町おこし、さらには世界平和へのご貢献など、まさに入来、鹿児島をリードする、私たちにとってかけがえのないご存在だつただけに、悔やんでも悔やみきれない思いです。

### 弔辭

薩摩川内市市長 岩切 秀雄



故入来院貞子氏は平成六年、夫入来院重朝氏の故郷である入来の地に移住してこられました。以来十六年余、我が故郷としてこの地をこよなく愛され、その人柄や教養の深さを持つて「薪能」による地域おこしに尽力され、地域の人々のために心血を注いでこられまし

近年大きな病を克服され、これから一層の活躍が期待されていましただけに、ご遺族の皆様のお気持ちを拝察するに胸が痛みます。

東日本大震災被災者支援のため遠方におり、駆けつけることができませんが、ありし日のお姿を偲び心より故人のご冥福をお祈り申し上げます。

た。その貞子氏が、入来の発展に欠かすことのできない逸材であったことは皆様の周知するところであり、改めて私が言明するまでもございません。

近年は、闘病生活の果てみごとガンを克服され、さらに活躍の場を広げようとされたいた矢先でのご不幸であつたと聞き及んでおり、貞子氏を敬愛していた者の一人として、衷心より哀悼の意を表します。

さて、入来薪能の歴史を紐解きますと、貞子氏が入来に入られた年が、奇しくも祖先一族である渋谷氏の、関東下向七五〇年の節目であつたことに端を発します。貞子氏は、これを機に、伝統的な中世の街並みが現存する入来の地で「薪能」をぜひとも実現させたいと切望され、県内外の文化人に広く呼びかけられました。また、地域においても町おこしグループ「入来花水木会」を発足させ、夫の

重朝氏と二人三脚で企画運営の中核を担つてこれらました。平成十一年に「第一回入来薪能」を開催以来、「静寂な闇夜に揺れる美しい幽玄の世界」を現代に蘇らせるという壮大な試みを六回にわたって成功に導いてこられました。一方で、「入来文書」の訳者でもある横浜市立大学名誉教授矢吹晋先生の講演会の実現も成し遂げられました。

ご存知の方も多々いらっしゃるかと存じますが、入来文書は福島県二本松市出身の朝河貫一博士が、鹿児島県の旧家入来院家とその一族に伝えられた古文書を研究して、昭和四年に英文で発表した論文でございます。これは、一つの地に六〇〇年も領主であり続けてきた入来院氏一族を解析することで日本の封建時代の成り立ちを説明した世界的な文献とも評されております。その後、この論文は前述した矢吹晋教授により邦訳されましたが、

貞子氏はこれを独自に調査研究され、昨年十二月に発行された「火の鳥」一〇号」に「貞子が語る入来文書」と題してその成果を発表されておられます。西欧における日本研究に不可欠とも言われる朝河貫一博士の研究内容を知る上で、大変わかりやすい文章との定評があり、情熱のこもった数々の功績にただただ頭の下がる思いであります。

このほか、貞子氏は県下の中高校生の文化的向上にも目を注がれ、県歌人協会と連携して「まごころ青春短歌会」も立ちあげられ、徐々にその根も定着しつつあります。

今後とも、貞子氏のご遺志を関係者の皆様方に當々と受け継いでいただき、奥深い日本文化の神髄を探求していただくとともに、引き続き、地域発展の主翼を担っていただければと切望するものでございます。

本市といたしましても、貞子氏のご功績を

無にすることなく、関係各位のご協力を賜りながら、「歴史の町」、「入来文書の里」としての入来を全国に向け、積極的に発信してまいる所存であることをお伝え申し上げ、結びといたします。

## 弔辭

炉ばたセイ談  
会長 桐野 三郎



貞子さん、元気な貴女にお会いしたのは三週間ちょっと前、まだひと月も経っていません。四月のペンシルクラブの例会でした。その日の講師は貴女と同じ「火の鳥」の同人杉山武子さん。さすがに貴女のお仲間だけあってすばらしいお話をでした。

あの日の別れしな、貴女と話したのは私たちの会誌「炉ばたセイ談」7号の発刊についてでした。

そして編集長の貴女から全会員に連絡が届いたのがほんの十日ほど前。それなのに今日、いま、こうして貴女の葬儀に参列し、貴女の遺影を前に弔辞を読まなければならぬとはー。

正直に言つて私にはまだ信じられないのです。あるのはただ驚きばかりで悲しみに浸る余裕すら湧いて来ないといつてもいいぐらいの状態であります。

私の目に触れた最後の貴女の文章は「隨筆かごしま」一八五号の「山北の便り（59）勵ましの言葉に寄せて」でした。

「今日はいい励ましの言葉が載つていた」朝食を済ませて炬燼に座ると夫が言つた。

という文章で始まる貴女らしい暖かいぬくもりの伝わつてくる東日本大震災にまつわ

るエツセイでした。そして結びはこうです。

そうだ。間もなく復興の槌音が響きわたり、活気のある日本が戻つてくるにちがいない。私は日本の底力が世界をリードする日も遠くないだろうと信じている。

しかも、この隨筆かごしまが発売されたのもほんの十日ほど前です。こんな希望に満ちた文章を残して、貴女がこんなにも突然に彼岸に旅立たれようとはー。

しかしながら、こんなことを申し上げたら、ご遺族のお気持ちに添わないかもしれませんが、あえて一友人として言わせていただけるなら、長野県に生まれ、愛する家族に看取られながら入来武家屋敷の茅門邸で七十八年の生涯を閉じた入来院貞子の人生は「存分に自分の人生を生き切つた」みごとな終止符で閉じられたようにも思われてくるのであります。最後まで貞子流を貫き通すとでもいうように。

弔辞を読むという責をはたすためには歴史家、文筆家としてももとより、薪能や短歌など、貴女が果たした文化的業績にも触れなければならぬのでしようがそれにはより適任のかたがおいでと存じますので、そちらにお譲り申し上げ、私はただただ入来院ご夫妻に

知遇を得た幸運に感謝申し上げて弔辞といたします。

最後に唯ひとつ。貞子さん的心残りは最愛の夫、重朝氏の落胆ぶりでございましょうが、そこは及ばずながら私も友人のひとりとして、茅門邸の囲炉裏ばたで焼酎でも酌み交わしながら叱咤激励してまいる所存でございますので、貞子さん、どうぞ心安らかにお眠りください。

(平成二十三年五月五日)



## 弔辭

鹿児島県日中友好協会

会長 海江田順二郎



「入来院貞子様が亡くなられたそうです」

鹿児島市日中友好協会の大石副会長からの電話に私は一瞬耳を疑いました。つい数日前の日中友好協会総会にご夫婦で元気なお姿を見せられたばかりなのに、そんなことがあろう筈がないと言いかけましたが、ご自宅での転倒が元で脳の障害を起こされての急死と知り、言葉を失いました。

貞子様にはご実家、信州霧ヶ峰昭和寺が主宰される「世界平和同願会」の運動にご夫君共々熱心にたずさわってこられましたが、一方アジアの平和の基礎となる日中関係にも強

い関心を持たれ鹿児島市日中友好協会の常任理事として、その運営に積極的に関わってこられました。特に今年度は協会の女性部会長として、文化活動を通して日中の相互理解と関係改善に意欲を燃やされ、私共も大いにご活躍を期待いたしていた矢先のご逝去であります。

貞子様は鹿児島市日中だけでなく鹿児島県日中友好協会にも協力され、総会の記念講演の講師に中国経済を専門とされ、中国に関する評論家としても名高い、矢吹晋先生に二度に亘つて招請して頂きました。福島県出身の矢吹先生は郷里の大先輩に当たられる朝河貫一文学博士の顕彰会代表理事も務めておられます。ですが、この朝河貫一博士こそ米国のイエール大学の教授在任中に「入来文書」を英文で世界の学界に紹介され、日本の封建制度の実態が始めて資料的に認知されました。

矢吹先生が英文の入来文書を日本語に翻訳して出版されてから貞子様には入来文書の原籍地である入来町で矢吹先生の「朝河貫一博士と入来文書」に関する講演会を何回となく開催され、鹿児島県内外の歴史学者や研究家が入来院家ゆかりの入来町に多数参考して話題を呼びました。

貞子様は文筆家としても知られ、鹿児島の郷土雑誌「隨筆かごしま」に毎号軽妙な筆致で機智に富んだエッセイを寄稿してこられました。先月二十五日発行の最新版にも「励ましの言葉に寄せて」と題して「東日本大震災から復興した日本が再びその底力で世界をリードする日を信じている」との名文を遺しておられます。

私は昨夜、貞子様が女流作家の同人誌「火の鳥」に寄稿された「連理の星霜」を読み返しました。貞子様のお父上、山崎良順和上が

その恩師渡辺海旭師との因縁で連なる東京新宿の老舗中村屋を創業した相馬愛蔵とその妻、

良との波乱にみちた生涯を、人物評伝の白眉

とも称すべき名文で綴られましたが、あとが

きの末尾に筆者夫妻も愛蔵と妻良が「連理比翼」の深い夫婦の契で結ばれていたように終

りたいと結んでおられます。

このたび俄にお淨土へ旅立たれた貞子様には恐らく佛の國からお一人遣されたご夫君重朝様を温かくお見守り下さるものと信じて已みません。貞子さまにはご主人様同様に日中友好協会の私共も影ながらお導き頂きますようお願い申し上げお別れの言葉に代えさせて頂きます。合掌（平成二十三年五月五日）

## 弔辭

華短歌会

前代表 川涯利雄



貞子さん あなたを喪つて残念無念です。

あなたは歴史研究家として、作家として大きな才能をお持ちでした。

同人誌「火の鳥」第二十号の「貞子が語る入来文書」はみごとな作品ですね。語るような自然な文体で朝河貫一博士の労作「入来文書」の世界を解いてゆかれる手腕、情熱に言葉もありません。

あなたはその歴史研究に向ける情熱と同じ熱情を町興しに向けられました。月餅を作り薪能を主催し、まごころ青春短歌大会に全力を注いで下さいました。自分の損得など全



く眼中にありませんでした。

まるで乙女のような澄んだ魂を込めて、人  
のために取りこんで下さいました。日本一流  
の方々と交わり、一流の学識をもち、八百年  
の歴史を持つ入来院家の嫁でありながら、あ  
なたはちつとも偉ぶらず威張らず自然体で人  
を温かく迎えて下さいました。最も良質の美  
しい日本の婦人、眞の大和なでござりました。  
あなたは癌にちつともたじろぎませんで  
したネ。抗癌剤で髪の抜けた頭を私どもに見  
せて笑っておられました。あの落ちつき、静  
かな心はどこから来るのか、私にはまだわか  
りません。立派な生き方でした。この人は癌  
を克服すると私は確信しました。その通り、  
あなたには豊かな髪がかえり、美しい微笑が  
帰つてきました。

そして復活しながら、今回突然逝つてしま  
われたのは何か？

あなたの親しい人々が皆とまどつていま  
す。

今となつて、何を言つてももう間に合いま  
せん。しかし、一つだけ重朝さんが、呑みす  
ぎる時は膝をついて「あなた・・・」とた  
しなめて下さい。元気を回復して、これから  
も私どものよき指導者として、力をふるつて  
下さるよう、お守り下さい。私どもがあなた  
のようなみごとな人間として成長できますよ  
う、見守つて下さい。(平成二十三年五月五日)



## 弔辭



友人代表

岩元 忠雄

貞子さんの余りにも突然の悲報に取るもの

も取り敢えず大阪から駆けつけて参りました。  
往生の素懐を遂げられた貞子さんの前に様々  
な思いが蘇つて参ります。

その第一番が入来院重朝君との出合いです。  
昭和二十一年四月終戦の翌年我々は旧制川内

中学校に入学第一学年の同クラスが彼との縁

の始まりでした。

或る日突然僕に殴り掛かって来たクラスの  
生徒が居りました。後のヘルシンキオリンピ  
ックの選手として出場した友達ですが、その  
時「ナイオスットカ！」と中に割つて入り僕

を庇つてくれたのが入来院君でした。爾来六  
十五年のお付合いです。  
当時彼は武の方にも長けておりましたが、  
文の道では特に秀でておりました。文学に於い  
て、又美術の面でも素晴らしい素養の持主で  
した。

そして十年後、貞子さん 貴女との遭遇で  
す。昭和三十一年三月十一日、丁度今年のそ  
の日東日本大震災が襲つてきました。入来院  
君謂く、その日が第五十六回目の結婚記念日  
だつたと・・・。

つまり五十六年前のその日、入来院君と貴  
女も早稲田大学の学生でした。新宿のさる小  
さな料理店の小さな部屋に向き合つて、お二  
人が結婚を宣言されました。「お前が只一人の  
立会人だよ」と。あのおりの本当に初々しい、  
又こぼれる程の幸せに満ちた貴女が思ひださ

れます。

其の後、矢張り印象深いのは入来に帰鹿されてからのご活躍ぶりです。特に文筆活動では、この春送つて頂いた「火の鳥」の「貞子の語る入来文書」大変労作ですが之が絶筆ですね。薪能の招致、短歌の会等々その優れた又幅広い文艺活動は誰もが知る所です。

只、我々仲間が尊敬する入来院君が一番心の頼りにし心底敬愛し続けて来たのが、貞子さん貴女です。七十八歳の未だ惜しまれる年齢ですが、信ずる道を躊躇なく進み、やりたい事を遣り、自分の人生を存分に生きてこられた様に思われます。本当に素晴らしい人生でしたネ。

此れからは入来院君を、又、お子様達の未來をお導きください。貞子さんのご遺徳を偲び哀悼の意を表し、私の弔辞といたします。

(平成二十三年五月五日)



庶流入来院家茅葺門